

ĐỊNH HƯỚNG ĐÀO TẠO SAU ĐẠI HỌC TẠI KHOA TIẾNG NHẬT - TRƯỜNG ĐẠI HỌC HÀ NỘI

TRẦN THỊ CHUNG TOÀN*

Những năm gần đây, trong xu thế quan hệ hợp tác giữa Việt Nam và Nhật Bản ngày càng phát triển, tại Việt Nam, mối quan tâm về Nhật Bản đã được nhân lên sâu rộng, đặc biệt là trong các lĩnh vực như kinh tế, chính trị, văn hóa, văn học, giáo dục... Việc giảng dạy tiếng Nhật đang được đưa dần vào bậc phổ thông nhằm phổ cập hóa ngoại ngữ này. Hơn nữa, việc nghiên cứu Nhật Bản đang đứng trước yêu cầu xã hội đặt ra là phải được thực hiện một cách khoa học hơn và chuyên sâu hơn. Trong xu thế đó, bài viết của chúng tôi bàn đến việc mở hệ đào tạo sau đại học chuyên ngành tiếng Nhật của Trường Đại học Hà Nội.

Chúng tôi xem xét các sự kiện hoạt động kỷ niệm 35 năm thiết lập quan hệ ngoại giao Việt Nam - Nhật Bản diễn ra tại Việt Nam gần đây, đặc biệt là cuộc thi tìm hiểu Văn hóa Nhật Bản do Công ty P&T tổ chức và 2 hội thảo khoa học quốc tế do Đại học Quốc gia Hà Nội tổ chức, phân tích các số liệu người tham dự, kết quả thu nhận và những đặc thù về cách lí giải văn hóa của người Nhật, mối quan tâm và quan niệm của người Việt về Nhật Bản, cũng như cách thức và các đặc trưng của việc nghiên cứu Nhật Bản tại Việt Nam trong những năm gần đây. Mặt khác, dựa trên số liệu điều tra của Quỹ Giao lưu Quốc tế Nhật Bản và qua thực tế đào tạo tiếng Nhật tại Việt Nam, chúng tôi thấy rằng: tuy việc giảng dạy tiếng Nhật có phát triển nhưng vẫn chưa phổ cập sâu rộng dẫn đến việc nghiên cứu tiếng Nhật và nghiên cứu Nhật Bản đang gặp nhiều khó khăn, đội ngũ nghiên cứu trẻ (chúng tôi gọi là thế hệ nghiên cứu thứ 2) đang còn ở tình trạng thiếu hụt. Từ đó, có thể cho rằng, việc tận dụng mọi nguồn lực để mở hệ đào tạo sau đại học là điều cần thiết phải làm trong bối cảnh hiện nay.

Trường Đại học Hà Nội có 35 năm kinh nghiệm giảng dạy tiếng Nhật và đó sẽ là một trong những thuận lợi trong việc kế thừa thành quả, phát huy các mặt mạnh, khai thác tiềm năng sẵn có để có thể mở hệ đào tạo sau đại học về Nhật Bản tại Trường. Đó là việc huy động mọi nguồn lực như sự giúp đỡ của các chuyên gia Nhật Bản, huy động lực lượng cán bộ trong và ngoài Trường, chú trọng định hướng bố trí các giáo viên trẻ làm trợ giảng cho các chuyên gia lâu năm và các chuyên gia Nhật Bản để học tập kinh nghiệm và chuẩn bị cho việc chuyển giao công nghệ, phát triển đào tạo lâu dài. Mặt khác là sự mở rộng quan hệ hợp tác, tiến tới mở thêm các chương trình liên kết đào tạo với các cơ sở của Nhật, phát triển việc đào tạo và nghiên cứu tiếng Nhật của đơn vị ngày càng chuyên nghiệp và đa dạng hóa hơn.

* PGS.TS., Khoa tiếng Nhật, Trường Đại học Hà Nội

Chương trình đào tạo thạc sĩ Ngôn ngữ học Nhật tại Trường Đại học Hà Nội được thiết kế như sau:

STT	Khối lượng học tập		Phân bố số tín chỉ cho từng khối môn học	
1	Các môn chung theo qui định của Bộ GD&ĐT		Triết học: 5 tín chỉ, Ngoại ngữ: 2 tín chỉ	17,5%
2	Các môn cơ sở	Bắt buộc	3 môn = 6 tín chỉ	15 %
		Lựa chọn	Chọn 1 trong 2 môn = 2 tín chỉ	5%
	Các môn chuyên ngành	Bắt buộc	5 môn = 11 tín chỉ	27,5%
		Lựa chọn	Chọn 3 trong 9 môn = 6 tín chỉ	15 %
3	Luận văn		08 tín chỉ	20%
Cộng			40 tín chỉ	100 %

ハノイ大学における日本研究専攻大学院設置諸課題

はじめに

近年、ベトナムにおける日本への関心は経済、政治、文化等の多岐にわたり、益々深まってきている。日・越外交関係樹立35周年を機会にその関心は政府の政策から一般の人にもまで及ぶようになってきた。従ってベトナムにおける日本語教育は中等教育にまで普及されつつある一方で、より専門的に日本研究へ進むべき姿勢を取ることが要求されてくるようになった。本稿はその軌道に乗せるべく、ベトナムにおける日本研究について幾つかの課題を取り上げ、特にハノイ大学における大学院設置の課題を論じることを目的とする。

1. ベトナムにおける日本へ関心、近代から現在までの再認知

ベトナムは近代に入り、日本語学習においては20世紀初頭の遊東運動があげられる。そして現在に至るまでの100年以上にわたる流動する歴史の中、日本に対するベトナム人の認識に幾つかなの変化があったが、次第に確実的な姿勢へと辿り着くようになった。

日本への感心から「日本に学び」「日本の援助を求める」ことを目的に行った遊東運動は、両国間の外交関係から正式に承認されなかったため、両国民の間には実らない結果となっていた。その後、第二次大戦が行われ、日本軍がベトナムに侵攻してから、ベトナム人は日本に対して再び関心を持つようになった。戦争が終結した直後にベトナム人の中では日本は「ファシズム」や「帝国主義」であり、地理的な面では、ベトナムと同じアジアにあり、人種の面でも同じアジア人で、黄色人種である、また、背が低いと言ったイメージを持っていた。

ベトナムが独立し、1973 年に両国間に正式な外交関係が樹立された。その後、日本との関係は断続的に行っていたが、1990 年代以降、日本語学習が再開され、学習者の数は毎年増加していった¹。日越両国の関係は益々緊密さを増し、日本への理解、認識も一般の人々から研究者まで、少しずつ変わっていった。

2003 年に日本・ベトナム外交関係樹立 30 周年、そして今年 2008 年には更に 35 周年を記念し、ハノイやホーチミン等、大きな都市を中心に多くのところで様々な日本文化紹介活動が行われた。また、日本文学作品の翻訳への関心が払われ、マスコミ等を通して、日本への情報も簡単に得られるようになった。日本への興味が深まり、現在では、日本に対する認識も変わってきている。

本稿は今年、日本・ベトナム外交関係樹立 35 周年を記念に行われた 3 つのイベントの中で、一般の人々、そして、研究・専門家、それぞれの対象が、日本に対してどのような関心・認識を持っているのかを明らかにし、それを通して、ベトナムにおける日本研究の動向及び位置を検討する。

まず P & T 社が主催した「日本文化知識コンテスト」²を紹介する。

2008 年にはベトナム全国で行われた種々の活動のなか、当コンテストが特別な意味を持っている。

在ベトナム日本国大使館広報センターの資料³によると 10 月 19 日現在、ハノイ及び周辺都市における文化交流の事業 39 件が登録されている。そのなかで、日本文化理解系の事業の殆どは両国の政府に属する機関、または大学の主催者である。P & T Group が唯一のベトナムの有限会社として当コンテストを行った。当コンテストは、ベトナム人、特にベトナムの若者を対象に、日本へのより強い興味を喚起することを目的として、2008 年 5 月から 8 月までの 4 ヶ月間に続けられた。以下の表にまとめた。

表 1

実行時間	応募者数	行い方
5 月	11.120 名	クイズ形式: 日本文化について出された 10 の質問に E メールか携帯メッセージで応答する
6 月	13.786 名	
7 月	17.947 名	
8 月	235 名	興味のある日本文化の事柄についてベトナム語で書き、投稿してもらい、審査委員会を設け、3 名を選抜する

¹ 「ベトナムから日本への留学生の数は去年 2007 年で約 2,500 人、ASEAN の国々では 1 番目、全世界でも 4 番目に多いのです。その 10 年前の 1997 年には 235 人ですから、どれだけ急速に日越両国の関係が緊密になり、重要さが増してきているのかわかるといいます。」2008 年 8 月 26 日「日本語スピーチコンテスト」にて在ベトナム日本国大使館松永大介公使の挨拶より。

² <http://ptgroup.vn/default.php> をご参照ください。

³ http://www.vn.emb-japan.go.jp/html/List_of_35.pdf,

コンテストに応募した人数からも、ベトナム人の日本文化に対する興味の深さが伺える。9月の表彰式において、ファム・ダオ・ラム Pham Dao Lam 社長は、当コンテストは 7 歳から 79 歳までの幅広く、多くのベトナム人の関心を引き寄せたと述べた。

8月の参加者 235 名から、第一予備選に選抜された 15 名の文章を見たところ、日本及び日本文化についてベトナム人の関心は以下の表にまとめた。

表 2

順位	文字、形 ページ数	内容	ジャンル	日本へ言及した言葉
1	手書き 4	民族、着物、能	論説	「扶桑という国」 「日が登る国」 三菱、ロボットあしも
2	活字、挿 絵 7	文字、合気道、食文化、生け 花、家族など幅広く言及された	日記	過去にあるファシズムイメー ジがあった
3	活字 1 4	家族、若者、挨拶、着物、茶 道、合気道、年中行事	論説	桜、富士山、「日が昇る 国」、アニメ
4	活字 8	日本でお正月を過ごした感想	日記	大国 伝統的な習慣
5	活字 1 7	習字、書道	論説	富士山
6	活字 2 6 挿絵	寺院、建築、食文化、生け花、 茶道、マンガ、文学	論説	大国、Ashimo、地震、 過労、「日が昇る国」、「桜 の国」、どらえもん、
7	活字 3 4	経営文化	小論 文	「桜の国」、島国、武士道精 神、親子会社
8	活字 1 6	日本に生まれた 7 歳の子の感 想：日本の歴史、食文化、年中 行事、日本人の性格、	感想 文	「島国」「日が昇る国」「桜 の国」「馬神国」
9	活字 9	歴史、年中行事、茶道、 日本とベトナムの類似点、日本 の援助、企業進出	手紙	侍、着物、桜、菊の花、「扶 桑の国」、富士山、大国
1 0	活字 2 4 挿絵	茶道	物語	茶道
1 1	挿絵、手 書き 7 0	音楽祭、一般情報、経済・科 学・技術、ODAと両国関係、 伝統文化	論文	桜、島国、富士山、盆栽、着 物、相撲、経済大国、「扶桑 の国」天国、電子工業、神秘 的な発展
1 2	挿絵、活 字 5 4	桜、日本人、正月、着物、芸 者、冠婚葬祭、相撲、茶道日本 語	日記	マンガ、桜、富士山、着物、 「日が昇る国」「桜の国」 「扶桑の国」
13	手書き、 挿絵、34	歴史・文化史概要、食文化、着 物、正月、相撲、合気道、文 字、生け花、茶道、浮世絵、歌 舞伎、侍、剣道、芸者、マン ガ、寺	簡略 紹介	独自で優れた文化を有し、伝 統文化を有しながらヨーロッ パ、アジア、北米からの影響 を受けた

14	挿絵、活字 51	日本へ8日間旅行した時の感想、認識：交通、日常生活：スーパー、大学、ホームステイ、温泉、仕事上の文化、電車、伝統文化への意識、世界遺産、	日記	「桜の国」
15	活字、10	大阪、お母さん（日本の女性）、沖縄、寿命	感想	たたみ、温帯、すし等

当コンテスト、そして、以上の表から、次のようなことが推察できる。

応募者の殆どは、日本語を学習していないか、日本に行ったことがない者である。また、日本へ行った経験があったとしても、一週間ほどの短期滞在であった。そういう意味で、この応募者の日本に対する理解の仕方は、一般の人々を代表するものだといえよう。

日本に対するイメージはベトナム人の間に、いくつかのキーワードとして共通している。実際、ベトナム人にとって「日本」は「桜の国」「日が登る国」「扶桑という国」等と認識され、「日本人の女性」は芯がしっかりした、理想的な結婚相手であった。そして、テレビドラマの「おしん」を通して、日本女性は、「おしん」のような人というイメージを持ち、現在もベトナムの俗語には「Oshin」という言葉があり、それには「専業主婦」、「ハウスメイド」、「ご主人に尽くす」などの意味を含め、陰・陽両方のイメージが存在している。男性は、昔なら「武士」また「武士道」の精神で「主君には忠をつくし」、「忍者」、英雄的な行動を行うと考えられていた。このようなイメージは、特にベトナムの高齢者や日本の社会に接触した経験のない人々であり、その影響は現在の人々の発言や文章にも見られ、以上の原稿からも多くみられ、一般の人々による日本への認識が反映されたものとなった。

日本のバイク、自動車、家庭電化製品、パソコン等がベトナムに輸入され、それらを通して、「日本製」の商品に憧れ、日本の技術に驚嘆し、品質の良さに対する信頼度も非常に高くなっている。「トヨタ」「ホンダ」「三菱」「三井」「着物」「味の素」等の名称は人々に大変親しまれている。また、「ドラえもん」を始め、多くの日本の漫画本が、ベトナムの子供たちに読まれ、日本の子供たちとは身近の友人であるような感じを与えられている。

以上15の原稿において、日本文化として取り上げられたのは、主にお茶、着物、剣道、書道、生け花、年中行事などの伝統文化であったが、徐々に音楽、漫画、電車、技術、ODA等の現代日本事情にあるものに移転されてきている。特に、日本滞在を経験した人々には、日常生活から感じ取った日本人の性格、

日本の現代的な習慣・文化を多面的・かつ確実的に捉えられるようになってきている。

このように当コンテストの結果からもベトナム人の日本文化に対する関心、認識への糸口を掴むことができるといえよう。

次に去年（2007 年）と今年（2008 年）にハノイ国家大学が主催した、日本語教育・日本研究国際シンポジウムの結果を通して、ベトナム人の研究者の日本への関心・認識について紹介する。

表3 ベトナムにおける日本研究国際シンポジウム

実行担当者	外国語大学・東洋言語文化学部・日本語文化学科	人文社会科学大学・東洋学部・日本学科
実行時間	2007年11月15日～16日	2008年09月12日～13日
テーマ	「日本語学・日本語教育シンポジウム」	「ベトナムにおける日本研究促進にむけて」
原稿数	60（日本語系：45、越語系：15）	37（日本語系：7、越語系：26、英語系：2）
内容	日本語学、日本語教育を中心にベトナムにおける教育政策、現状、研究の実績紹介	日本研究を中心にベトナムにおける現状、政策、実績紹介

この二つのシンポジウムは、ベトナムにおける日本語教育・日本研究に関して最初に日本語で行われたものであり、それらの現状が反映されている。

まず、日本語教育・研究を中心に行われたシンポジウムでは、日本語教育に携わっているベトナム人の教師、特に若い教師が数多く参加し、発表者によって取り上げられた研究テーマは普段に携わっている仕事上の課題であった⁴。また、調査研究等を行い、実証的な研究方法を行っている傾向が見られた。しかし、日本研究を中心に行われたシンポジウムでは、ベトナム語による発表が圧倒的な多数を占めていた。このシンポジウムには、日本語でない資料を通して日本研究を行う一つの流派が活躍していることが反映している。この流派は、60年代に日本経済が世界に注目された時から、ベトナム、中国、ヨーロッパなどの研究者によって成り立ってきた流派である。彼らが新たに日本を研究対象に加え、日本研究者であることがベトナム人研究者の間の暗黙の了解であった。日本語の資料、情報に接するには制限があり、英語、中国語、フランス語、ロシア語など、または、それらの言葉から重訳された資料を通して、日本研究を行っているわけである。

この流派の日本研究内容は次のとおりである。

⁴ Truong Thi Maiハノイ大学日本学部「依頼Eメールに対する評価意識の相違から見たベトナム人と日本人の「対人配慮」、Nguyen Thi Bich Ha「日越語における擬声語・擬態語の対照研究」

「60 年代から90 年代にかけて主に三つの課題を取り上げた。その一つは日本経済の各局面を概略に紹介したこと。第二は日本がベトナム戦争に干渉した時期のこと、第三は日本が経済的に大国に素早く成長してきた奇跡的な現象として取り上げたことである。」⁵。また、「日本の歴史は早期からベトナム人の研究者によって研究されていた。この5年前までは、明治維新又は1970年代までの日本経済発展を主に研究対象としていた」。

以上の指摘にも見られるように、ベトナムでの日本研究は経済から出発し、特に日本を奇跡的に成長した経済大国としての日本を中心に上げることが大きな課題であった。これは、特に90年代までのベトナムにおける日本研究の特徴だと言える。日本語使用研究者がまだ育ていない時、日本を紹介するたのに、この流派が果たした役割は大変大きい。そしてこの流派の研究者たちは、ベトナムでは、第一世代の日本研究者となっている。しかし、「重訳した」資料から情報を得たのでは、不正確な情報がないということはあるのである。

「東北アジア・日本研究雑誌の調査によると、現在ベトナムでは日本研究者が95人存在しているが、殆どの場合には研究内容が日本とベトナムとの比較研究であり、概略で留まっているため、実際に日本研究の専門家とは言えない、専門的・且つ真剣に行われる者が少ない。」⁶とグエン・バン・キム氏が指摘している。

その後、90年代後半には、日本へ留学した学生、研究生が段々増えてきた。その中、日本の文化、習慣、社会事情などに精通し、不自由なく日本語を駆使できる若い研究者が数少ないながらも毎年増加している。特に、日本の大学で修士号、博士号を取得した者もいる。そのため、日本研究は経済から教育、文化、思想等、多くの分野に広げられ、研究方法、研究内容も日本で学んだ知識を生かし、より確実な研究成果を納め、第二世代の日本研究者が少しずつ成り立つようになってきたのである。

シンポジウムの開催、また、そこに集まった専門家、発表された内容からベトナムにおける日本への関心が、局面的な見方から基礎知識へ、そして、徐々に学術的、専門的な課題へと変化してきていることが伺える。

以上、最近ベトナムで行われた三つのイベントを通して、現在のベトナム人における一般の人々から研究者までの日本への関心・日本研究の現状について概略を紹介した。一般の人々、そして、第一・第二世代の日本研究者は、マ

⁵ Nguyen Van Kim前掲論文、330 ページ

⁶ Nguyen Van Kim 『ベトナムにおける日本研究促進に向けて』ハノイ国家大学付属人文社会学大学国際シンポジウム紀要「ベトナムにおける日本研究の特徴及び動向」三三〇頁

スーメディアによって、日本への認識に変化がおこり、少しずつ確実な方向へと向かっている。従って、ベトナムでは日本研究をより専門的に行うことが社会へのニーズとなってきた。

2. ベトナムにおける日本語・日本研究教育の特徴

日本との外交関係が樹立した1970年代に、ベトナムでは日本語教育が開始されたが、最初にハノイ貿易大学、ハノイ外国語大学といった公立大学に限定され、その後、両国の政治関係の変化に連動して、貿易大学以外では、日本語教育が一時停滞した状態にあったが、1990年代から再度復興するようになった。現在、日本語教育は高等教育にまで広がり、教育機関数、教師数、学習者数のすべてが増加している。

国際交流基金調査によると1970年から2006年までのベトナムにおける日本語教育の動向は次のとおりである⁷。

表 4

年度	機関数	教師数	学習者数
1970	9	18	739
1975	13	39	1558
1981	2	6	不明
1988	2	6	25
1990	1	6	25
1993	19	134	3055
1998	31	300	10106
2003	55	558	18029
2006	110	1037	29982

表で分かるようにベトナムにおける日本語教育は年々発展方向に向かっている。

ベトナム教育には国立大学が大きな役割を果たしている。日本語教育もその例外ではない。

現在ベトナムでは、日本研究を専門的に教育をしている機関は未だどこにもない。

研究所に関しては、1993 年に国家社会・科学研究所属する東北アジア研究院に日本研究センターが開設された。このセンターは現在、ベトナムにおける最初の正式な日本研究機関として活躍し、ベトナムで唯一の日本研究センター

⁷ 日本語事業部企画調整課『日本語学・日本語教育』国際シンポジウム論文集「世界の日本語教育とベトナムにおける日本語教育の動向「海外日本語教育機関調査」から」277～278 ページの内容より、ハノイ国家大学出版、2007 年

となっている。当センターにおいて第一世代・第二世代の日本研究者が活躍し、ベトナムにおける日本研究の典型的な例となっている。

要するにベトナムにおける日本語教育・日本研究の特徴は次のようにまとめることができる。

(1) 日本語教育は以前より成果が上がってきているが、まだ普及されていない。近隣の中国やタイや、アジアの韓国、インドネシア、インド等にはまだ歴史も実績においても比べられない状況にある。これはベトナムでの日本研究にも影響を与えている。日本研究にはまだ言葉の壁があるという現状である。従って、日本語使用の研究者がまだ主流になっておらず、重訳資料を使用する第一世代の研究者が比重を占め、ベトナムでの日本研究がまだ過渡期にある状態を作り出している。

(2) 日本研究・教育機関が孤立的・分散的な状態にある

(3) 日本語教育から日本研究に繋げるカリキュラムや計画が、今もまだ確立されてない。

3. ハノイ大学における大学院の日本語・文化専攻設置

以上、ベトナムにおける日本研究は、基本的な教育機関がまだ十分整備されていないという現状を述べた。この現状から切り抜け、ハノイ大学は大学院を開設し、そこからベトナムでの日本研究を軌道に乗せていく役割及びそれを成し遂げる可能性があると考えている。

ハノイ大学では日本語教育が1973年に開始され、35年の歴史を持っている。日越外交関係の状況に伴い、日本語教育が停滞した時期もあるが、1993年に第一期の日本語の学部生を教育し、1998年にそれらの学士を世に送り、その翌年、1999年に日本語学部が正式に編成された。現在まで35年間発展し、幾つかの経験及び成果を収めている⁸。

現在、当学部には日本語講師のうち、助教授が1人、博士号をもつ者が2人、修士号をもつ者が11人いる。その他、修士課程を履修している者が4人、博士課程を履修している者が1人いる。これらの講師たちは、大学院教育に大切な人材となり、皆は進学する計画を立て、将来において学部の修士課程・博士課程における仕事が担えるよう勤めている。

他に当学部の講師として日本の専門家に協力を求めることが可能である。日本の専門家が当学部に渡り、集中講義を行うことも考えうる。

⁸ 本シンポジウムにある「ハノイ大学における日本語教育の現状と動向 ～社会的ニーズおよび大学院での養成への直結～」を参照。

また、ベトナム国内においては、貿易大学、ハノイ国家大学のような、ハノイにある各大学、研究機関に勤めている第一・第二世代の日本研究者からも協力を得る計画を立てている。

このように当学部は内外における全ての力を尽くし、日本語・文化専攻大学院を設置し、学問研究・学術交流の拠点となるよう努力する。

教育カリキュラムはベトナム教育・訓練省に定められた規則に従い、ベトナムでの日本語教育・日本研究の特徴を把握した上、作成にあたって幾つかのことも配慮した。

3.1. カリキュラム作成の特徴

3.1.1. 授業の行い方

ベトナムにおける学部教育は2学期制を取っているが、今後単位取得制にむけて調整する。大学院教育は単位取得制を中心に、特に集中講義の方が主流である。本カリキュラムの作成にあたって、その現状を軌道に乗せていく。

また、授業の行い方に関しては次のようなことを想定する。

(1) 第一世代のベトナム人の日本研究者による講義

第一世代の日本研究者の長所である、彼らの研究した経験、研究成果を生かしてベトナム語での講義を担当する。例えば、言語学に関する知識は、学部での日本語教ではまだ不十分に与えられないので、ベトナム語でそれを補足する。そして、一般情報、関連情報等、研究者の立場からの捉え方を院生に紹介する。

(2) 第二世代のベトナム人の研究者による講義

原則としては、日本の大学で修士号または博士号を取得した講師が担当する。

日本語使用の講師は、科目に関する参考文献を取り上げ、テキストをはじめ、他の資料へのアプローチを院生に指導する。専門用語のリストを作り、院生に資料を読ませ、問題を探り出し、修士論文作成を指導する。

日本語を中心にした授業を行い、院生が分からないことはベトナム語でも説明する。

日本人教官が授業を始める前には助手の教師を加え、日本人の教官から資料を貰い、院生に資料を読んでおくよう指導する。

講義終了後、日本人の教官から宿題としての問題点が提起され、それを解決するため、必要に応じて、院生を援助する。

日本人教官から資料を事前に渡されない時、又は、院生が日本語で授業を受けられない場合には通訳を付けて、授業を行う。

(3) 日本の専門家が担当する集中講義

事前に担当の助手と連絡を取り、日本の大学院における集中講義・授業の行い方を導入し、実行する。

3.1.2. 他の研修・就職経験

本カリキュラムに組まれた科目以外に、院生が更に楽しく学習できるよう、また、知識や経験を補足することを目的に、以下の科目・活動を検討する。

(1). 日本語能力向上

入試に合格した者に対して、プレースメントテストを行い、また修学中に希望に応じて日本語能力を向上させるための各種講座の講義も検討する。

(2). 研修活動

修学中の課外活動として、日本の会社に勤めたベトナム人・日本人の経験者又は日本人の企業・会社の責任者・管理者に協力を求め、現場での研修、または交流会の開催を検討する。

3.1.3. カリキュラムの構成

日本に関する総合的・学際的な知識を養成することを中心にしたカリキュラムを作成する。

表 5 カリキュラムの構成

順位	専修・分野科目		単位数	比重
1	共通科目	哲学	5	17,5
		第二外国語(英語)	2	
2	基盤科目	必須	6	15
		選択	2	5
	専攻科目	必須	11	27,5
		選択	6	15
3	卒業論文 ‘		8	20
計			40	100

3.2. 今後の課題

以上、ベトナムにおける日本語教育・日本文化理解を背景に、そして、ハ

ノイ大学が持つ日本語教育の実績及びそれを成し遂げた可能性を前提に、短期的な計画として、本大学での日本言語・文化を専攻の教育カリキュラムを作成した。このカリキュラムは本大学を含め、ベトナムが過渡期にある段階として試行錯誤しながら実行し、その後調整する必要がある。そして同時に、長期的な戦略を立てることも要求される。次のような案を検討していきたい。

(1). 将来、ハノイ大学の進路に合わせ、日本研究の計画は長期的に考え、日本人の専門家から講義内容及び講義の行い方を学び、将来 仕事を引き継いでいくことに重点を置く。

(2). 学部のカリキュラムは大学院レベルに繋げるように改善され、少しずつ組まれるように努める。

(3). ベトナムで日本文化、文学研究・翻訳の拠点となるため努力する。日本文学研究文献・作品をベトナム語に直訳し、出版社と連携してベトナム語で出版する。それらを通してベトナム人に日本文化・文学を紹介する。

(4). 日越専門用語辞典を作成し、内外の研究者と共同研究を行い、定期的にハノイにいる院生、研究者の間に10人ぐらいの小グループを作り、勉強会や数十人規模での研究者発表会や100人以上のシンポジウム等を主催する。

(5). 日本研究文献、参考文献を集め、日本研究資料館を作る。

(6). 修士課程が軌道に乗ってから、それを踏まえ、より専門的・学術的な研究を進めるため、日本語学、日本文学、日本文化、日本経済学の博士のコースを展開する。

(7). 日本からの専門家をベトナムの大学に客員研究員・教授として招聘し、そこで直接ベトナム人学生に学ぶ機会を与え、また、ベトナム人専門家と共同で研究することも検討していく。

将来、修士・博士コースは日本側の大学・センターと連携教育することも検討していく。

終わりに

日本とベトナムの両国民の間には有好的な信頼関係があり、ベトナム人は「日本に学べ」精神が常に沸き、日本人、日本文化に対して陽的なイメージが多く持ち、それらが両国の友好関係・文化理解の有利点となっている。ベトナムにおいて日本文化を確実に効率的に理解するため、教育に力を入れる必要がある。基礎知識を学んだ若者からベトナム社会に浸透させるのがベストである。その方針に基づき、日本語教育から日本研究に繋げる大切な役割を担うのも、日本語教育において一つの課題となっている。

ベトナムは1995年にアメリカとの国交正常化、ASEAN正式加盟、1998年にAPEC正式加盟、2007年にはWTO正式加盟などを果たしてきた。特に全方位外交の展開、アセアン、アジア・太平洋諸国等近隣諸国との友好関係の拡大に努める外交基本方針は、日本語教育・日本研究分野に対してもより力を入れ、促進させてきている。更にその新しい局面にあるベトナムに対して、日本側は現在までベトナム経済発展に貢献を重ねてきた。今後はさらに日本文化の受容を計画的、効率的に、より力を入れることにも期待したい。

付録

表6・履修時間数 (週数)

学期	授業	試験	正月・夏休み	計
I	15	2	3	20
II	15	2	2	19
III	15	2	3	20
IV	卒業論文作成			
計	45	6	8	59

表7 授業科目

順	コード	授業科目名	単位数	履修時間数 (講義・演習)
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
I. 共通科目 (17,5%)			12	
1	JP.501	哲学	5	75/0
2	JP.502	第二外国語(英語)	2	0/90
II. 基盤・専修科目: (63,5 %)				
II. 1. 基盤科目 (20 %)			8	
2.1.1. 必須科目: 06 単位 (15%)				
3.	JP.503	研究方法論	2	15/30
4.	JP.504	言語学概論	2	15/30
5.	JP.505	対照言語学	2	15/30
2.1.2. 選択科目: 2 (5%)			2	
6.	JP.506	文章論	2	15/30
	JP.507	社会言語学	2	15/30
2.2. 専修科目 (42,5 %)				
2.2. 1. 必須科目: 11 単位 (27,5 %)			11	
7.	JP.508	日本語教授法から実践編へ	2	15/30
8.	JP.509	一般言語理論及び日本・ベトナム語との対照言語学からみる見る日本語学	3	30/30
9.	JP.510	翻訳論	2	15/30
10.	JP.511	日本文化史概論	2	15/30
11.	JP.512	日本文学史概論	2	15/30

II. 2. 選択科目: 3 科目 (15%)			6	
12.	JP.513	日本語演習 II : ビジネス文章、新聞記事への翻訳スキル向上	2	15/30
13.	JP.514	貿易実務における日本語教育	2	15/30
14.		日本語教育のための音声学・音韻論	2	15/30
15.	JP.515	日本語彙教育・研究	2	15/30
16.	JP.516	テレビ・コマーシャルと文化研究	2	15/30
17.	JP.517	異文化理解の理論と実践	2	15/30
18.	JP.518	日本人の精神文化	2	15/30
19.	JP.519	画像資料を用いた文化研究方法論	2	15/30
20.	JP.520	日本現代文学: 代表的な作家・作品	2	15/30
III. 卒業論文 (20%)			8	0/480
計: 40 単位				

表 8・履修学期案内

順	コード	授業科目名	単位数	学期別		
				1	2	3
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
I. 共通科目 (17,5%)			12			
1	JP.501	哲学	5	+		
2	JP.502	第二外国語(英語)	2	+		
II. 基盤及び専修科目: (63,5 %)						
II. 1. 基盤科目 (20 %)			8			
2.1.1. 必須科目: 06 単位 (15%)						
3.	JP.503	研究方法論	2	+		
4.	JP.504	言語学概論	2	+		
5.	JP.505	対照言語学	2	+		
2.1.2. 選択科目: 2 単位 (5%)			2			
6.	JP.506	文章論	2			+
	JP.507	社会言語学	2			+
2.2. 専修科目 (42,5 %)						
2.2. 1. 必須科目: 11 単位 (27,5 %)			11			
7.	JP.508	日本語教授法から実践編へ	2		+	
8.	JP.509	一般言語理論及び日本・ベトナム語との対照言語学からみる見る日本語学	3		+	
9.	JP.510	翻訳論	2		+	
10.	JP.511	日本文化史概論	2	+		
11.	JP.512	日本文学史概論	2	+		
II. 2. 選択科目 (15%)			6			
12.	JP.513	日本語演習 II : ビジネス文章、新聞記事への翻訳スキル向上	2			+
13.	JP.514	貿易実務における日本語教育	2			+
14.		日本語教育のための音声学・音韻論	2			+
15.	JP.515	日本語彙教育・研究	2			
16.	JP.516	テレビ・コマーシャルと文化研究	2		+	
17.	JP.517	異文化理解の理論と実践	2			+

18.	JP.518	日本人の精神文化	2			+
19.	JP.519	画像資料を用いた文化研究方法論	2		+	
20.	JP.520	日本現代文学: 代表的な作家・作品	2			+
III. 卒業論文 (20%) : 第 4 学期						

表 9 授業担当教員

順	コード	授業科目	単位数	教員	勤務先
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1.	JP.501	哲学	5	教授 Trần Phúc Thăng (博士) Lê Văn Sự (博士)	ホーチミン 政治・行政 国家学院
2.	JP.502	第二外国語(英語)	2	Nguyễn Thái Hà (修士) Nguyễn Nguyệt Minh (修士)	ハノイ大学
3.	JP.503	研究方法論	2	助教授 Trần Thị Chung Toàn (博士) Nguyễn Thị Minh Hương (修士)	ハノイ大学
4.	JP.504	言語学概論	2	教授 Nguyễn Thiện Giáp (博士)	ハノイ国家 大学・人文 社会科学大 学
5.	JP.505	対照言語学	2	助教授 Vũ Ngọc Cân (博士)	ハノイ大学
6.	JP.506	文章論	2	助教授 Vũ Ngọc Cân (博士)	ハノイ大学
7.	JP.507	社会言語学	2	教授 Nguyễn Văn Khang (博士)	言語学研究 所・人文社 会化縛研究 院
8.	JP.508	日本語教授法から実践編へ	3	Vũ Thúy Nga, (修士) Phạm Thu Hương (修士) Trương Thị Mai (修士)	ハノイ大学
9.	JP.509	一般言語理論及び日本・ベトナム語との対照言語学からみる見る日本語学	2	助教授 Trần Thị Chung Toàn (博士) Vũ Minh Hiền (修士)	ハノイ大学
10.	JP.510	翻訳論	2	助教授 Vũ Văn Đại (博士) Lê Văn Liêm (博士)	ハノイ大学
11.	JP.511	日本文化史概論	2	教授 白幡洋三郎 (博士)	国際日本文 化研究セン ター
12.	JP.512	日本文学史概論	2	Hoàng Liên (博士) 岡和明 (修士)	バンヒエン 大学
13.	JP.513	貿易実務における日本語教育	2	Nguyễn Văn Hào (修士) Nguyễn Thị Bích Huệ (修士) Nguyễn Thị Minh Hương (修士)	貿易大学 ハノイ大学

14.	JP.514	日本語教育のための 音声学・音韻論	2	教授 杉本妙子 (博士) Phạm Thu Hương (修士)	茨城大学 ハノイ大学
15.	JP.515	日本語彙教育・研究	2	助教授 Nguyễn Thị Bích Hà (博士) Nguyễn Tô Chung (修士)	Trường Đại học Ngoại thương ハノイ大学
16.	JP.516	テレビ・コマーシャルと文化研究	2	順教授 山田奨治	国際日本文化研究センター
17.	JP.517	異文化理解の理論と実践	2	教授 杉本妙子 Trương Thị Mai (修士)	茨城大学 ハノイ大学
18.	JP.518	日本人の精神文化	2	Phạm Hồng Thái (博士)	東北アジア 研究所・人文社会科学 研究院
19.	JP.519	画像資料を用いた文化研究方法論	2	教授 白幡洋三郎 (博士)	国際日本文化研究センター
20.	JP.520	日本現代文学: 代表的な作家・作品	2	教授中川成美 (博士) Hoàng Liên (博士)	一橋大学 ハノイ大学

参考文献

1. ハノイ国家大学所属外国語大学『「日本語学・日本語教育」国際シンポジウム論文集』ハノイ国家大学出版社、2007年。
2. ハノイ国家大学所属人文社会科学大学『ベトナムに於ける日本研究促進に向けて』(紀要)、人文社会科学大学 2008年
3. 『教育法』2005年07月14日にベトナム国会決議より
4. 『大学院教育運営・管理上のガイダンス』ベトナム教育訓練省大臣により2000年10月24日に発行された決定書号 9798/SDHより
5. 『大学院・修士課程教育規定』ベトナム教育訓練省より2008年08月05日づけ発行された決定書号 45/2008/QĐ-BGD&ĐTより
6. 『英語・ロシア語・フランス語・中国語の大学院の各カリキュラム』ハノイ大学学長より2007年5月11月付け発行された決定書号 585/QĐ-ĐHHN-NCKHより
7. 『大学院プログラムにおけるカリキュラム』ハノイ国家大学出版、2005年
8. 『東洋学・アジア専攻におけるカリキュラム』ハノイ国家大学理事長より2007年10月22日付け発行された決定書号 3940/SDHより
9. 『ベトナム学学士教育カリキュラム』ハノイ国家大学理事長より2007年10月22日付け発行された決定書号 3940/SDHより
10. 宇都宮大学、**大学学生便覧**、平成19年度(2007年)
11. **履修案内**: 大学院地域文化研究科博士前期課程、東京外国語大学、平成19年度(2007年)

12. *Japanese studies around the world-2006, Research on Art and Music in Japan -A Colloquy with Foreign Scholars Resident in Japan* - Edited by Patricia Fister and HOSOKAWA Shuhei, International Research Center for Japanese Studies, 2007.
13. www.osaka-wu.ac.jp
14. www.musabi.ac.jp
15. www.nanzan-u.ac.jp
16. www.okayama-u.ac.jp
17. www.ritsumei.ac.jp, www.seikei.ac.jp
18. www.shitennoji.ac.jp
19. www.tachibana-u.ac.jp
20. www.tokaigakuen-c.ac.jp ...